

EBV関連胃癌にESDを施行した1例

症例

【症例】 77歳 女性

【現病歴】

スクリーニング目的に上部内視鏡検査施行。

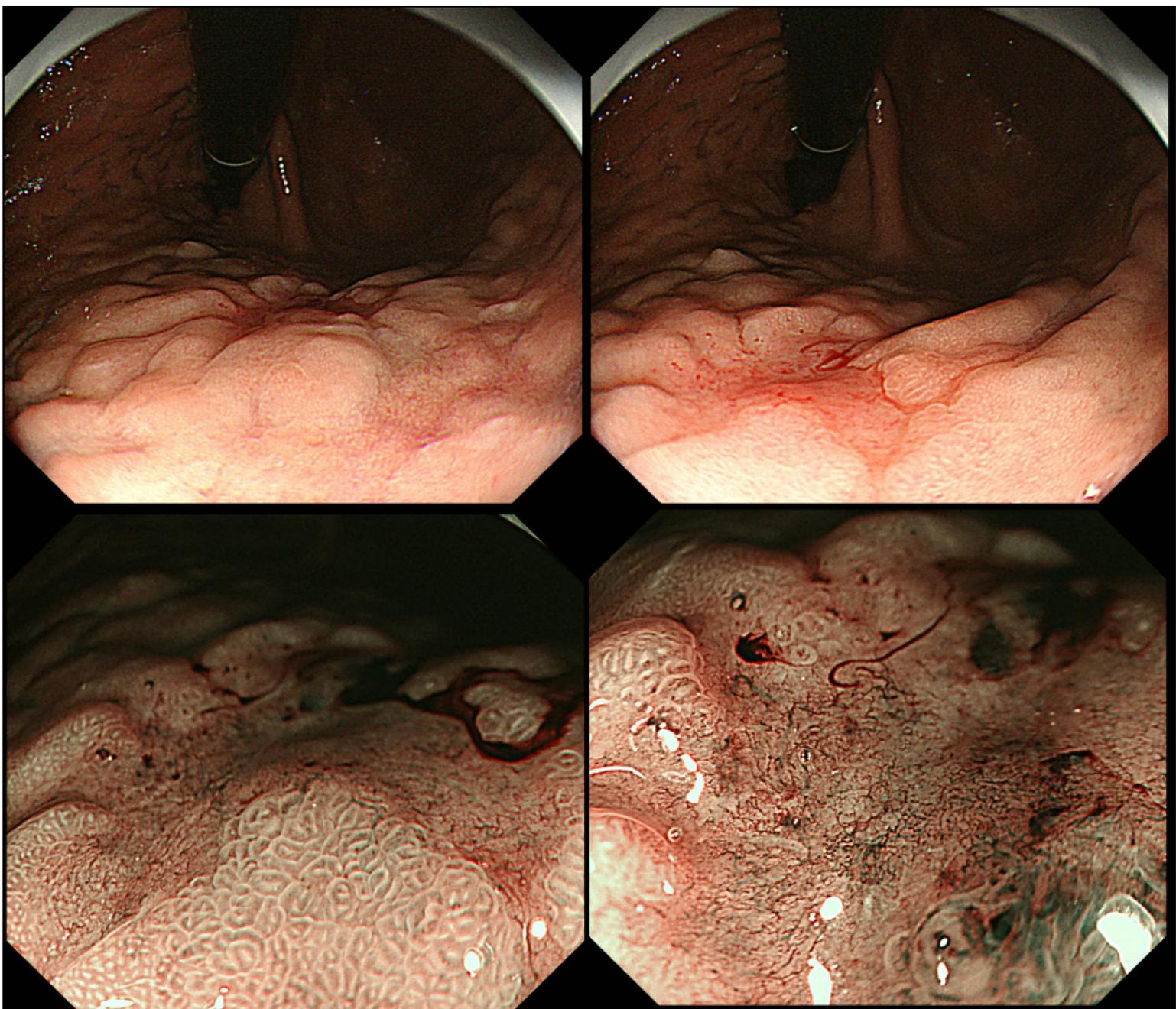
胃体上部小弯に15mm大の0-IIc病変を認め、生検結果はGroup 5、Adenocarcinoma (tub2)の診断。ESD施行目的に当科入院。

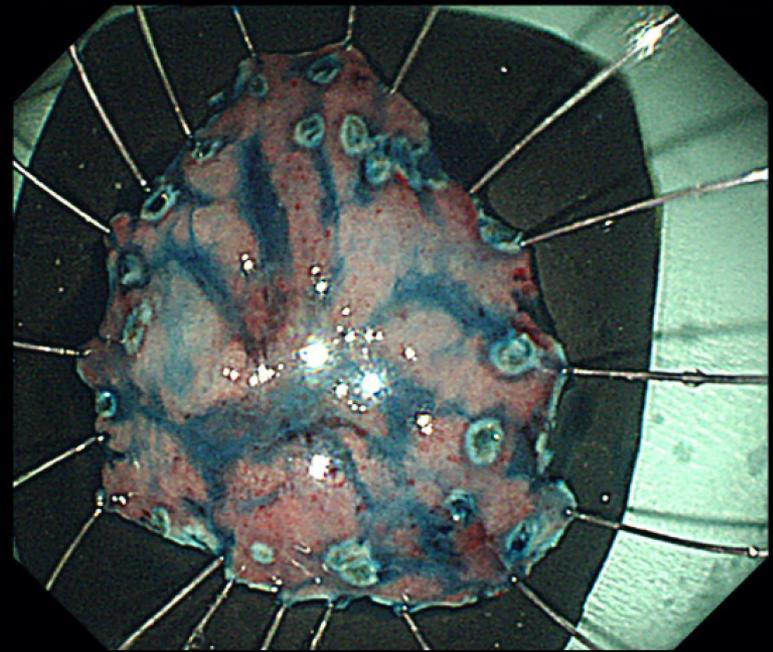
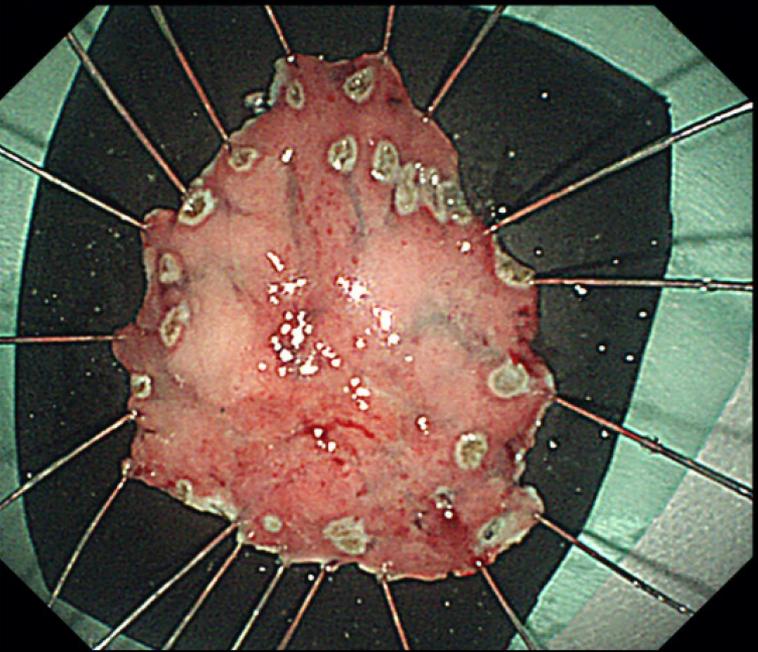
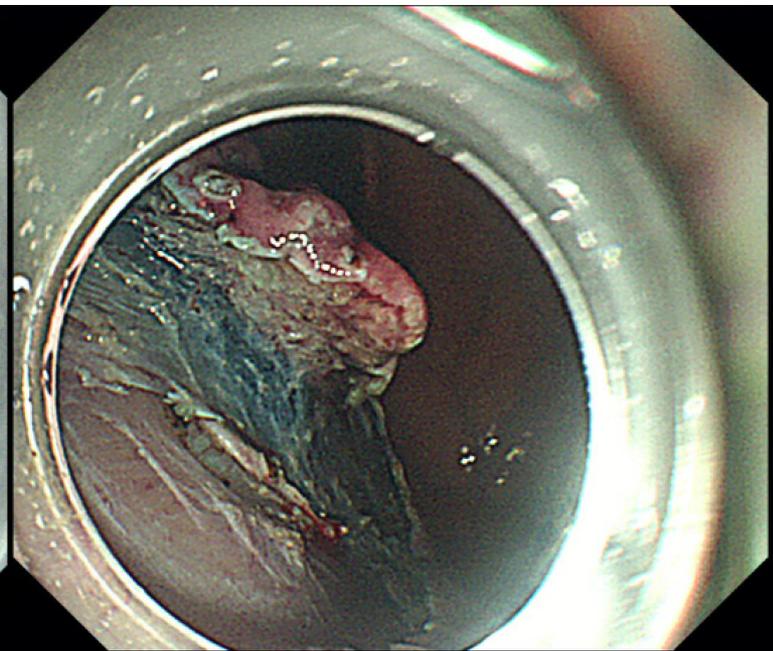
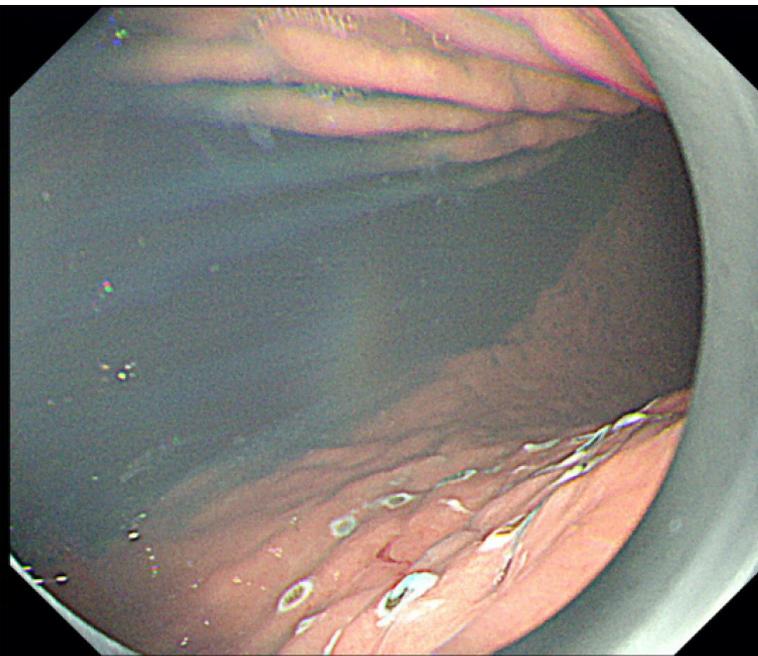
【既往歴】 虫垂炎術後、AMI(PCI後)

【内服薬】

バイアスピリン、エフィエント(エフィエントのみ中止)
タケキャブ、クレストール、カルベジロール

【嗜好歴】 飲酒:なし 喫煙:15本/日





病理結果

組織型 : Carcinoma with lymphoid stroma

深達度 : SM2 (at least)

潰瘍 : UL (一)

脈管侵襲 : Ly0、V0

切除断端 : HM0、VM1



内視鏡的根治度C-2



追加外科切除の方針

EB関連胃癌について

- 胃癌全体の10%弱に認められる *原田祐子ら Molecular Medicine 1997*
- 男性優位（4：1程度）、60歳代前半に好発
- 多発例や残胃に発生することが多い
- **胃の近位部**に発生することが多い *Kaizaki Y, et al. Gastric Cancer 1999*
- 内視鏡所見としては**0-Ⅱc型**を主体とした陥凹型が多い *Yanai H et al. Gastrointest Endosc 1997*
- 粘膜下層への浸潤を伴うと，SMT様の柔らかい隆起が病変全体または陥凹内部に認められる

EB関連胃癌について

- EB関連胃癌の多くは、粘膜下層以深では癌細胞が小胞巣状、充実性に増殖し、腫瘍内外に高度なリンパ球浸潤を伴うリンパ球浸潤癌（**Carcinoma with lymphoid stroma**）の組織像を呈する
- 粘膜内に限局する早期胃癌では不規則な癒合を示す小型腺管構造を呈することが多く、**lace pattern**と呼ばれる
- EB-virus-encoded RNA (EBER) をin situ hybridization (ISH) 法で検出することで、胃癌細胞へのウイルス感染を確認することができる

海崎泰治ら 胃と腸 2018 Vol.53

EB関連胃癌について

- 感染しているEBウイルスはmonoclonalであることから、発癌初期の段階からEBウイルスが感染していると考えられている
- PD-L1/2の高発現などを認めており、免疫チェックポイント阻害剤の治療への応用も検討されている